

平成26年度 学校評価実施報告書

学校名(東山泉小中学校)

1 平成26年度 重点評価項目

1. 確かな学力の育成(将来を拓く力の育成をめざし、子どもたちの論理的思考力を高める。／英語教育を通し、グローバルな視点で将来を拓く力を育てる。)
2. 豊かな心の育成(道徳教育と道徳授業の充実／9学年を繋ぐピアサポート活動の推進)
3. 健やかな体の育成(自律による自己管理能力を育てる)

2 1回目評価

・重点評価項目について評価・改善していくための個別評価項目の設定 ・各項目にねらいを定めた取組の計画・実施 ・取組結果を検証するためのアンケート項目や各種指標の設定						自己評価		学校関係者評価	
						評価日	平成26年10月17日	評価日	平成26年10月22日
						評価者・組織	1st/2nd合同運営委員会	評価者(いずれかに○)	○学校運営協議会 学校評議員
分野	評価項目	自校の取組	アンケート項目・各種指標	アンケート結果・各種指標結果		分析 (成果と課題)	自己評価に 対する改善策	学校関係者評価に よる意見	学校運営協議会・学校 評議員による改善 に向けた支援策
1	確かな学力	基礎的汎用的能力の伸長を旨とした授業づくり 論理的思考力の育成を旨とした言語活動の推進 家庭学習の習慣化と、学ぶ意欲の向上	学習指導要領に基づく指導案作成と公開授業 東山泉としての言語活動と論理的思考力の定義化につながる授業展開 校内における自学環境の整備と、家庭学習に繋がる自学ノートの充実	キャリア教育を通して伸長を図る基礎的汎用的能力の重要度と達成度 自分の考えを説明して伝える。話し合い活動で考えを深め広める。 家庭学習の状況とその内容	保護者アンケートでは、重要度の認識に対して実現度が追いついていない 9年生では83%が考えを深め、広められたとの意識を示す 平日1時間以上の家庭学習が約70%、宿題に費やす時間が多い	⇒ ・キャリア教育の視点での学力向上の意の周知が不足 ・研究主題に「論理的思考力の向上」を掲げ、言語活動の充実と繋げた全教科での授業づくりが、児童・生徒の意識に反映してきた。 ・家庭学習の質的向上のため、学ぶ意欲を重視する必要がある	・基礎的汎用的能力の具体的な活動場面をシラバスに明記して示す。 ・本校で定義した論理的思考力の判断・思考・表現の思考モデルをさらに全教科・領域に徹底させる。 ・自学ノートの取組の継続と、その評価法の研究を進め、学ぶ意欲の伸長を図る。	⇒ ・子どもに考えさせる授業ができていない。 ・国語力を高めるには書かせることが必要。言語活動の意味を理解した。 ・家庭学習をどの時間帯にしているのか？TVやゲームに費やす時間との関連も考えるべき。	・保護者は子どもを通して東山泉の教育内容を見ているが、学校が描く授業づくりの理解の徹底にむけ、自治会等、諸団体による地域発信にも努める。 ・学校運営協議会「学び支援部会」として放課後まなび教室の支援を継続する。
2	豊かな心	人権教育の視点にたった道徳教育の充実 道徳主任を中心とした道徳授業の充実 9学年を繋ぐピアサポート活動の充実	道徳教育推進教師を中心に、子どもたちが楽しく学べる学校づくりの推進 年間35時間の道徳授業の充実と、実践的態度の育成 縦割り活動の有効性を引き出すお世話活動の実施	社会性実存調査での相手の気持ちや配慮、学校が楽しい学びの場 シラバスに基づいた各学年の実施状況の点検と学習内容 各行事計画の検討、及びねらいの明確化	学校が楽しいは95%以上、相手の気持ちに配慮する意識は約80% 年間計画にほぼしたがって授業が行われている 縦割りでの活動を含む行事計画にお世話活動が組み込まれている	⇒ ・落ち着いた学校生活により、自他を認め合う集団となっているが、教育環境の充実が必要。 ・道徳教育推進教師と道徳主任とをシェアし、それぞれの役割を果たす結果となった。 ・開校までの4校での既存の取組にピアサポートを位置づけられている。	・児童生徒一人一人の人格を尊重し、個性の伸長を図り、社会性を高める生徒指導の理念をさらに教職員に徹底させることが必要。 ・小中一貫教育校として、複数の学年との異年齢交流ができる利点を、お世話活動と協働活動のねらいを明確にした企画立案に繋げる。	⇒ ・京都府のいじめの件数が多いことを新聞報道で知ったが、京都市、東山泉ではどうか？いじめ問題の解決にはコミュニケーション、表現力を高め、意思の疎通を図る力が必要。 ・道徳の教科化に向けて充実を図られたい。	・自治会活動を基盤に少年補導委員会、民生児童委員会、保護司会等の連携、協働を深める。 ・「チーム学校」としての組織化に向けた人材育成等、地域支援に努める。
3	健やかな体	自律心の育成と基本的生活習慣の確立 生涯にわたって運動に親しむ資質と能力の育成	環境教育、食教育の充実と、年齢に即した自律の実践力の育成 小学校課程でのクラブ活動、4年生からの部活動の充実	朝食の摂食、起床就寝、自己管理等、基本的生活習慣の点検 クラブ活動、部活動実施状況の点検と、児童生徒の活動状況	起床・就寝は規則正しいが、朝食の喫食90%弱に課題がある 部活動参加率は90%を越え、積極的な参加態度が見られる	⇒ ・年齢があがるにつれて朝食喫食率が低下。9年生で90%以上を目指す。 ・食育の中学校課程での充実を目指す。 ・部活動は休日の負担過多とにならない活動を考える。	・食育のあり方を、栄養摂取や食材等の知識理解に終わらず、味覚の学習として、五感を通した学習として位置付ける。 ・栄養教諭、養護教諭との連携を深め、保護者への働きかけを強める。	⇒ ・6月の運動会の学校評価アンケートの批判的な記述は、出場種目減と観客席の不足と理解。内容は評価できる。 ・朝食をとらない子どもの原因が不明。更に調査を望む。	・学校運営協議会「安全支援部会」では登下校の見守り活動を充実させる。 ・社会体育、体育振興会等と連携した支援に努める。
4	独自の取組	5・4制施設併用型小中一貫教育の推進 「夢創」(総合的な学習に時間)の推進 3小学区に渡る地域連携	小と中、学び、二つの学舎等、様々な繋ぎの工夫と実践 3年生からの7学年を系統立てたカリキュラムの編成と実践 開校までの統合協議会を構成する地域各種団体との連携強化を図る	東西学舎の交流の重要度と実現度 シラバスにおける7年間の系統性と学習計画の重要度と実現度 学校行事、登下校時の安全対策等に関わる地域連携の状況確認	重要度は約80%、実現度は全体で65%であるが、6年生は達成感が高い 重要度は約80%、実現度は全体で50% 開校を機に地域の見守り体制が人員も1.5倍増となった。	⇒ ・5・4制施設併用型小中一貫教育校として開校初年度に当たり、様々な繋ぎを、教職員のみならず、保護者、児童生徒が意識をするが、その整合性をはかる必要がある。 ・総合は7か年の長いスパンを見通せていない。 ・地域連携は開校を機に学校との距離感は縮まった。	・開校初年度に繋ぐべきこと、2年目以降も繋ぎ続けること、2年目からの新たな繋ぎ等、学校運営協議会で整理する。 ・総合は再度7か年の系統性を再考する。 ・地域諸団体との連絡会、協議会等に参加する教職員を、機能性の向上の視点から再考する。	⇒ ・5・4制として、6年生の成長、満足度は理解できるが、9年生の具体的な成果はどうか。 ・9年生の具体的な「目指す姿」を教職員が共有し、1学年ずつ積み上げていく意識をもつことが必要。	・次年度に向けて、定期的な情報共有に努め、西学舎と東学舎が交流できる取組や、地域との交流を検討する。 ・地域行事で子どもが活躍し、自己有用感の向上につながる場面をつくる。